

## [014\_0982]第十四回中央図書館貴重文物展観目録： 九州俳書

九州大学附属図書館中央図書館

中野, 三敏  
九州大学文学部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1485008>

---

出版情報 : 大学広報. 454, pp.1-8, 1982-09-30. The Committee of Public Relations Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

# 大学広報

№. 454

昭和57年9月30日発行

(編集)  
九州大学広報委員会

## 第十四回中央図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

九州俳書

はじめに

展観に際し教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

なお、今回の展示資料の選定、解説、指導、配列等について文学部中野三敏教授に多大の御尽力を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

記

展示場所：中央図書館メインロビー

展示期間：昭和57年10月4日(月)から

〳 57年11月9日(土)まで

## 展 観 資 料 の 解 説

近世文芸は江戸、京、大坂の三都を中心に展開したのであり、西の端に位置する九州は文化の面で後進地たることを免れなかった。俳諧とて例外ではない。近世文学最大のジャンルである俳諧だけに、九州地方の至る所に俳諧を嗜む風雅の士が多数現れたが、彼らは中央の俳壇の動きに左右されるのが常であった。芭蕉直門の俳人達が元禄以降相次いで九州行脚を行なうと、それまで貞門談林の古風俳諧に馴染んできた九州俳人は次第に蕉門へ傾き始める。中でも最も大きな勢力を誇ったのが野坡門と美濃派である。又、蕉門以外では松木淡々に連なる一派も力があった。一方、こうした中央俳壇の進出に対抗して自派の結束を固めようと努めた朱拙のごとき存在もある。しかし彼とて蕉門の影響を強く受けたことには変わりなかった。

今回の展示では、元禄から明和年間までを一応の目安として十六点選んでみた。『後枯野塚集』は明治の刊行だが、『枯のつか』の後集であり、本学所在地の箱崎とも関係が深いのでとり上げた。結果的には野坡門の俳書が多く含まれることになった。尚、九州俳書とは九州の俳人を中心として編まれた撰集のことを言うのであり、九州で出版されたという意味ではない。九州俳書の大半は京で出版されている。十六点いずれも本学附属図書館支子文庫蔵（故田村専一郎先生旧蔵）。十六点以外にも伝本が稀少で貴重なものが多い。

九州俳壇については大内初夫鹿児島大学教授の一連の御研究があり、本解説は専らそれに依っている。御礼申し上げる次第である。

## 1. 西の詞集

半紙本（22.0×15.5 cm）一冊。編者釣壺。元禄十四年重陽の自序あり。京、井筒屋庄兵衛板。刊行は元禄十五年とされる。春夏秋冬の各部に、芭蕉以下去来、丈草、惟然、野坡、杉風、其角等の有力門人及び九州を中心とした全国の蕉門の発句、釣壺と座羅の和漢・漢和連句を収め、釣壺と倫女の表合や風国追悼の発句、百韻一巡等が追加される。巻末に支考の発句を九句あげ、いずれも先作の剽窃であると激しく非難しているが、これは『西華集』で自作に加えられた支考の評に対する憤りがもとになっている。釣壺は豊後日田の医者で姓は吉弘、名を怨庵（或いは如安）という。談林俳諧を学んだが、元禄八年に日田を訪れた惟然に影響を受けて蕉風へと転向した。日田は九州の中で最も俳諧の盛んな土地の一つで、朱拙を初めとする一流俳人が活躍した。蕉風移行時代の九州俳壇の様子がうかがえる資料としても価値がある。

## 2. 枯のつか

半紙本(22.2×15.6 cm)一冊。編者晡川。杉風序。去来跋。巻末に「宝永甲申夏 晡川撰」とある。刊行は翌宝永二年。京、井筒屋庄兵衛板。編者晡川は箱崎に庵を結ぶ僧侶。晡扇ともいう。松月庵、十里庵とも称する。去来から、芭蕉の辞世吟「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」を入手した晡川は、九州行脚中の野坡に揮毫を依頼し、枯野塚を建立した。この塚の建立記念集が『枯のつか』である。杉風、曾良等の東武奇進句を初めとして京洛、難波、美濃、尾州、豊後、筑後の各地の蕉門による奇進句が集められ、博多連衆の発句、野坡、晡川等の歌仙二巻、蕉門諸家の発句と続く。去来、野坡の芭蕉高弟の好意によってますます芭蕉敬慕の念を強めたであろう晡川の喜びがうかがえる撰集。枯野塚は福岡市東区馬出に今も現存する。

## 3. 後枯野塚集

半紙本(22.5×15.7 cm)一冊。市睡撰。明治二十六年刊。出版・印刷・製本は博多呉服町竹田鉄耕堂。本集は前に紹介した『枯のつか』の後集である。明治二十六年十月十二日、市睡等は芭蕉の二百回忌を記念して、晡川の建立した枯野塚の横に芭蕉辞世「旅に病て夢は枯野をかけめくる」の句碑を新たに建てた。巻頭には枯野塚と新しい句碑、およびその周囲の情景を描いた上品な画が添えられ、「其塚(枯野塚)の魂なる祖翁の高吟を添碑にあらはして今とし二百年祭の記念とす」と句碑を建てたいきさつを書いた銘文も掲げられている。本集の内容は、明治二十六年十一月十二日に興行された芭蕉翁二百年祭奉納の百韻、奉納吟、歌仙などである。枯野塚とともにこの句碑も東区馬出の地に現存する。

## 4. 漆川

半紙本(22.2×15.7 cm)一冊。土明撰。朱拙序。土明跋。巻末に「宝永二年酉十二月 筑前土明撰」とあり、刊行は翌三年。京、井筒屋庄兵衛板。土明は筑前嘉麻郡(現在の嘉穂郡)稲築村漆生の人。姓野見山、名源太夫。跋文によれば『八雲御抄』にみえる筑前漆川を、宗祇の『指南抄』を根拠にして嘉麻郡漆生のこととし、来訪した朱拙とはかつて「漆川」を詠んだ句を集めた。これをきっかけに、朱拙の協力、後見を得て土明撰『漆川』が成った。名所、銭別留別贈答、哀傷并懐旧、祝言、その他四季折々の季題ごとに発句を配列している。この時期、野坡等芭蕉直門の俳人の九州行脚が盛んに行なわれ、九州の俳壇は強い影響を受けた。その中で朱拙は九州第一の俳人たる誇りもあって自己の勢力保持に努めたと思われる、『漆川』の朱拙序にはそういった気負いも見受けられる。

## 5. 門司硯

半紙本(22.7×16.0cm)一冊。全五十四丁。程十撰。享保十三年の野坡の序あり。京、額田正三郎板。程十は野坡門人で豊前小倉の人。享保十三年に九州行脚中の野坡が程十を訪れ、三十余日滞在した。その記念として、野坡の援助を得、本集が成った。前半は門司硯や平家蟹等の名産、傘松、追手川、企救高浜、柳ヶ浦、風仕山等の名勝を詠んだ句を集め、後半は四季発句等から成る。九州蕉門に対する野坡の指導力の大きさを物語の一集。尚、本集には二冊本も存在する。本文庫にも「門司硯 甲」の題簽を有する上巻を蔵するが、これは前半十五丁の名産名勝題詠句の部分の部分を独立させたもの。完本と比較するに板は全く同じであり、いずれが初版かは容易に決し難い。旧蔵者の故田村専一郎先生は一冊本の方を初版とされていた由である。

## 6. 此如月草

半紙本(22.9×16.3cm)一冊。枕山編。延享四年如月望月の枕山自序あり。虎堂跋。京、井筒屋板。枕山は長崎の人、勝木氏。号夢清舎。長崎の町役人という。自序の中で枕山は三千風を「我俳祖」と呼び、序末には「相州大磯鴨立沢中興三千風不肖孫峇陽夢清舎枕山謹序」と記すように、三千風系統の俳人であった。三千風風を長崎に伝えた助叟にも教えを受けたようである。三千風は西行五百年忌を記念して『和漢田鳥集』を編んだ。枕山は三千風の俳風を慕い、その志を継いで西行の五百五十年忌記念俳諧撰集を編み、「此如月草」と名づけた。一巡十巻に餘興、四季発句、雑を加え、巻末には枕山等の弔詩を載せる。当時の九州俳壇にあっては、三千風の流れをひく枕山の俳諧は少数派にとどまった。

## 7. やとの花 下

半紙本(22.4×15.8cm)一冊。本文庫は下巻二部を所蔵する。題簽「やとの花 下」。内題は「俳諧宿の花 下」。里舟撰。陽明社文雄跋。跋末に「寛延五辛未秋」とあるが、これは寛延四年(宝暦元年)の誤りであろう。上巻未発見のため、前半の内容が全く知れない。下巻は秋の部、冬の部、春の部、夏の部にわかれ、野坡門九州俳人達がこぞって吟詠を寄せている。秋の部冒頭には野坡の発句がとられているが、この句の下五文字をとって書名とした。文雄の跋によれば、里舟は父の七回忌追善のために諸家の作を集めていたらしい。文雄がしきりと里舟の「至孝」を持ち上げている事も関係があるのかもしれない。里舟は筑前赤間の人。

8. 松のつほみ

大本(26.7×19.8 cm)一冊。写本。巻末に宝暦四年の浮風の跋文あり。本集の成立事情は同跋に、「清江雅君書斎を無言室と号し其名に寄て諸風子の章句を集め数年にして机上に充るを一ふた巻となして予に是を清写すへくつゐてに又一章を綴りて跋せよと命せらる」とあって明らかである。清江の編集による。内容は「無言室」の題に寄せた発句や俳文を雑多に並べたものである。関西、中国、九州筋の野坡流諸家の作が多いが、巻頭には半時庵松木淡々の文と句を載せ、以下富天、舎梓、佳方等淡々門弟の作も見える。野坡門と淡々派という二大勢力の共存を反映した書と言うこともできよう。なお、清江は福岡の人。

9. なつよもき 下

半紙本(22.4×15.9 cm)一冊。佳方編。宝暦五年六月刊。大坂、吉文字屋市兵衛他二肆板。巻末に定栄堂の蔵版目録があり、半時菴の著述を並べる。当文庫所蔵本は下巻のみ。上巻は所在不明となっている。

蕉門に比べて閑却されがちだが、享保から宝暦にかけての上方では松木淡々の存在が大きい。難解、華麗な句風で人気を博したが、その俗人ぶりを嫌う声もある。彼の弟子達の九州行脚によって、当地にも淡々一派の俳諧が流行した。佳方はその弟子の一人である。倒枕舎と号す。『なつよもき』は佳方が宝暦初に行なった九州行脚の記念集であり、行脚の実態を知る上で重要な資料と言える。下巻には舟中吟以下、鶴崎連の歌仙、十景、別府連の四季発句、臼杵連中の五十韻、その他佐伯堅田郷や竹田、玖珠郡、日田など豊後各地で興行した連句やその地の俳人の発句などが数多く収められ、豊後に重点を置いた佳方の行脚を如実に物語っている。

10. 窓の春 上

半紙本(22.5×15.9 cm)一冊。本文庫は上巻のみを所蔵する。題簽欠。天理図書館蔵本は「俳諧窓之春 天」(下巻は地)の題簽を有する。浮風編。宝暦六年の青陽菴杏雨の序あり。京、井筒屋庄兵衛板。

元文五年一月三日に歿した野坡の十七回忌追善撰集。書名は野坡の「ほのぼのと鴉くろむや窓の春」の句にもとづく。浮風は直方の人、有井氏。享保三年、直方を訪れた野坡に入門する。野坡の死後大坂に住み、野坡追善事業を次々と主催した。『窓の春』撰もその一つである。上巻巻頭の追善俳諧百韻は、前年九月三日、野坡の無名庵で興行した。以下全国各地の野坡門の追善俳諧や四季混雑の発句等を収める。浮風の妻諸九尼も後に女流俳人として名

をなした。

### 11. 朱白集 上

半紙本(22.7×15.9 cm)一冊。本文庫には上巻のみ蔵するが、本来は上中下の三冊。浮風編。宝暦十一年孟春の青陽菴杏雨の序、同じく倚松の序、宝暦十二年二月望の浮風・暮雨撰の漢文序、およびその序文を「同撰」としたいきさつを説明した暮雨の一文がある。二人の漢文序と浮風の詞書によれば、宝暦十二年二月、四天王寺の傍、椎寺の後に野坡並びに芭蕉の石碑を建立し、同年四月二十六日に開眼供養が行なわれた。『朱白集』はその記念に編まれたものである。本集には二つの碑文が図入りで紹介されている。又、「二翁教誡之諭」として、「物いへは唇寒し秋の風」と「百生りに思ふ形なし後の月」の句が特に掲げてあるのも面白い。『朱白集』と名づけた理由として、詞書に、野坡が芭蕉の意を得て「朱をあかきといふは常也、朱を白きといふは変也、朱を赤きといふうちより白みも青みも顕はるゝこそ俳神也」と言った事を挙げている。上巻に句の見える九州俳人では、浮風の他杏雨、亀水、文雄、里舟、江棧および浮風の妻諸九などが目立つ。石碑に寄せた吟詠が多い。

### 12. その行脚集 上

半紙本(22.5×15.8 cm)一冊。本文庫蔵は上巻のみだが、本来は上下二冊。題簽欠。内題「その行脚集」。諸九尼編。宝暦十三年五月の青陽菴杏雨の序。又、文雄による「湖白菴行状記」が序に続く。これに湖白菴浮風の生涯がかなり詳しく記されている。宝暦十二年五月十七日、浮風は六十一歳の生涯を閉じた。本集は妻諸九尼によって編まれた浮風一周忌の追善集である。上巻には浮風の辞世「つれもありいまはの空にほとゝます」を初めとして諸九、文下、江棧、孤遊等浮風ゆかりの人々の追悼句が百ヶ日の分まで並んでいる。不義密通の罪を犯してまで浮風と夫婦になっただけに亡夫への思いは断ち難く、諸九はついに出家する。余生を全国行脚と俳諧に費し、天明元年九月十日、夫浮風の故郷直方で六十八歳で歿した。

### 13. 高津翁二十五回忌

半紙本(22.7×16.1 cm)一冊。題簽欠。江棧編。文雄序。文下跋。跋末に「明和四亥のとし秋九月」とあり。これも野坡門人による野坡追善集の一つである。宝暦十三年三月三日に浪華無名庵にて高津翁二十五回忌懐旧之誹諧が興行された。正確には翌明和元年一月三日に二十五回忌を迎えるのだが、浮風の『窓の春』と同様前年に繰り上げられたものと思われる。江棧は浮風、諸九、文雄、文下等と親しく、浮風の『朱白集』編集を助けてもいる。号筑紫

享保十一年二月二十日於浪華若庵興行

高津翁二十五回忌



懐舊之俳諧

江津さきくくそむ招ゆるれ柿う邪  
 ねむか〜とろろ 替 野王  
 けしきあふ〜後ひねわらわむく  
 梅は〜はは向〜きよ  
 潤二 文下

清く〜と松のく〜は〜あ〜り〜  
 ねと松〜は〜るり 懐 懐  
 さきう月かりと春の袂なゆるれと  
 きり〜と啼く風号あの中  
 れ秋はほめても母はゆわつひ  
 ばあ〜〜法や〜〜法ん〜  
 け〜〜と粉糠乃よ、あ〜〜  
 ころ〜のほ〜も〜い〜川〜あふ  
 け〜〜と〜む〜け〜〜と〜  
 画人 呼見 南無 随二 文智 洞花 可云

坊。文下の跋によると、本集編集に余命いくばくもない事を悟った江棧は「おなしくは故郷の土とならん」と筑紫に帰った。三年余り病の床につき、今年（明和四年）夏の始めに他界した。いまはの限りまで此集のことを思わずらっていた、という。編集の杜撰な点もあるが「たゝなき人のこゝろさしのあはれなるにめてゝ」とがめてくれるな、と言う文下の言葉には亡夫への哀惜の念があふれている。

14. 五色水

大本（25.7×18.0 cm）一冊。写本。明和五年の青陽堂杏扉の序文あり。第一巻、第二巻「俳諧五色水 鹿の足二」、第三巻「俳諧五色水 冬木立三」、第四巻「俳諧五色水 鶯の宿四」、第五巻「はるかひ五色水 百の赤子五」、第六巻「ハイカキ五色水 下つゝし六」の六巻から成る。全九十一丁。

享保十一年、野坡は四月に芭蕉三十三回忌の興行を主催したあと、九月に難波を発して九州に赴いた。十二年、十三年にわたって野坡は九州行脚に専念し、自派の拡張に意を用いた。『五色水』はこの折に野坡が福岡連中と興行した俳諧の句稿を順番に並べて整理したもの。野坡の行脚を跡づけるに不可欠の資料である。杏扉は杏雨の息。

15. 珠のしくれ

半紙本（21.9×15.7 cm）一冊。題箋、中央に「珠のしくれ 全」とある。可雲編。明和七

